

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	怒江州のカムチベット語丙中洛 [Bodgrong] 方言の方言特徴
Author(s)	鈴木, 博之
Citation	ニダバ , 43 : 40 - 49
Issue Date	2014-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045559">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045559</a>
Right	
Relation	



# 怒江州のカムチベット語丙中洛 [Bodgrong] 方言の方言特徴

鈴木博之

## 1 はじめに

本稿では、雲南省怒江傈僳族自治州貢山獨龍族怒族自治県丙中洛郷日當村で話されるカムチベット語 Bodgrong 方言に関する初めてのまとまった報告を提出する。特に Bodgrong 方言の音形式とチベット文語形式（以下「蔵文」）との対照を行い、チベット言語学上の方言特徴を明らかにする。

### 1.1 怒江州のチベット語概況

怒江州は雲南省北西部に位置し、西にミャンマーと接し、北にチベット自治区と接し、東に迪慶州と接する、多数の少数民族が居住する地域である。この中で、同州最北端に位置する地域はチベット文化圏と接していることもあり、チベット族も少数ではあるが居住しており、チベット語が話されている。

怒江州においてチベット語が話されているのは貢山県の丙中洛郷と棒當郷迪麻洛村にほぼ限られる。また、「丙中洛」という名称は前の2字が蔵文 *bod grong* 「チベット人の村」に対応し、最後の字（音）がリス語で「場所」を意味する。しかしながら、チベット語の言語使用と民族の関係には注意すべきことがある。丙中洛郷におけるチベット語話者はチベット族である場合もあれば、ヌン（怒）族である場合もある点である。丙中洛郷に居住するヌン族は、自民族の言語としてヌン語を話す。この言語は言語学的にはトゥルン語の方言とみなされ、文献によってはアヌ（阿怒）語と呼ばれている（孫宏開等 2002:9-12）が、現地ではヌン語という名称で通っている。丙中洛郷のヌン族はチベット族と通婚しており、文化的にもチベットの影響を多く受け、たとえばチベット語の民謡も歌うことが報告されている（何林・丁愛華 2009）。このような家庭では、子供の民族をヌン族として申請することが頻繁に行われているため、ヌン族のチベット語母語話者が生まれているといえる。このため、怒江州や貢山県の統計資料にもし民族別の総数が記載されてあったとしても、そこに現れるチベット族の総数はチベット語話者の総数ではない。ただしこれに類する資料は未見である。

丙中洛郷のチベット語話者は基本的に多言語を操る。チベット語のほかに、ヌン語、リス語、雲南漢語を話し、場合によってはトゥルン語も話す。この言語環境は棒當郷でも共通しているが、通常はチベット語、リス語、雲南漢語の3言語使用であるという。この状況は今

なお維持されており、各種民族の言語が話されている。この環境が当地のチベット語方言の発展に影響を与えた可能性がある、と現地の話者は考えているようであるが、それは言語学的分析を通して検証する必要がある。

貢山県のチベット語話者の最初期の祖先は、200年ほど前に迪慶州徳欽県雲嶺郷および燕門郷の各地から来た移民であると言われ、世代を数えることができる老年層の人もある。また、これらの地域のチベット族との通婚もよく行われている。注目すべきは、同じく隣接するチベット自治区察隅県察瓦龍 [Tsha-ba-rong] 郷からの移民はほとんどいないという点である。歴史的に見ると、約100年前に丙中洛郷（当時は菖蒲桶と呼ばれた）は察瓦龍の支配下に入ったが、その時にもチベット族の移民は生まれなかったようである。そのため、現地の人々の観察によれば、察瓦龍郷のチベット語 Tshawarong 方言と Bodgrong 方言は大きな異なりが認められ、基本的に初対面で通じる性格のものではなく、互いの方言の特徴を把握しなければ意思疎通は難しいという。なお、鈴木(2012)の記述にあるように、ミャンマーで話されるチベット語 Sangdam 方言の話者は Bodgrong 方言を理解でき、互いに近い方言であると感じるという。ただし、Sangdam 方言の話者は察隅県からの移民であって、徳欽県のチベット人とは関係がないと言ってよい。この指摘も言語学的に検証の必要なものである。

## 1.2 議論の内容

怒江州のチベット語方言に関しては、ほとんど報告も記述も存在しない。筆者は2013年に貢山県丙中洛郷を訪れ、現地のチベット語 Bodgrong 方言を記述した。初歩的な分析に基づき、Bodgrong 方言は sDerong-nJol 方言群の中の独立方言群を形成すると考えた (Suzuki 2013)。本稿では、Bodgrong 方言の形式を蔵文と対照することを通じて、方言特徴を具体例とともに概観することを目的とする。

本稿で議論する方言資料は、筆者自身の調査によって得たものを用いる。主として議論する Bodgrong 方言の調査協力者はロゾン [bLo-bzang] さん（男性；30代）である。

## 2 Bodgrong 方言の音体系概観

Bodgrong 方言の音体系は以下のようなものである。

【音節構造】最大で  ${}^c C_1 G V C C$ 。

注：音節末子音が2つ存在する場合、最後の1つは /ʔ/ である。

【声調】語声調で、 $-$ ：高平、 $'$ ：上昇、 $`$ ：下降、 $^$ ：上昇下降の4種。

【母音】各要素に対応する長母音・鼻母音が存在する。

i	u	ɯ u
e	ə	o
ɛ		ɔ
a	ɑ	

いくつかの母音には、少数例ではあるが、そり舌化母音が現れうる。

【子音】子音連続に現れるものも含めた一覧

		両唇	歯茎	そり舌	硬口蓋 前 後	軟口蓋	声門
閉鎖音	無声有気	p <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>	t <sup>h</sup>		k <sup>h</sup>	
	無気	p	t	t		k	ʔ
	有声	b	d	d̪		g	
破擦音	無声有気		ts <sup>h</sup>		tɕ <sup>h</sup>	çç <sup>h</sup>	
	無気		ts		tɕ	çç	
	有声		dz		dʒ	ʝj	
摩擦音	無声有気		s <sup>h</sup>		ɕ <sup>h</sup>	x <sup>h</sup>	
	無気		s		ɕ	x	h
	有声		z		ʒ		ɦ
鼻音	有声	m	n		ɲ	ŋ	
	無声	m̥	n̥		ɲ̥	ŋ̥	
流音	有声		l	r			
	無声		l̥	r̥			
半母音		w			j		

前部硬口蓋摩擦音は、自由変異として硬口蓋摩擦音で現れる場合がある。破擦音については、両調音位置で対立するため、この現象は認められない。

子音連続には主として前鼻音、前気音、わたり音を含むものがある。

### 3 Bodgrong 方言の形式と蔵文との対応関係

蔵文と口語との音対応を探る作業は、口語の発展を分析する重要な手段の1つである。ここでは初頭子音と母音+末子音の2種に分けて、蔵文と Bodgrong 方言との音対応について述べる。声調に関する議論は行わない。また、それぞれの項目において、周辺のチベット語方言との対比について簡潔に述べる。なお、チベット文字の表す音価は格桑居冕・格桑央京(2004:379-390)を参照。

#### 3.1 初頭子音

##### 3.1.1 閉鎖・破擦・摩擦音の有声性

Bodgrong 方言では、閉鎖・破擦音および摩擦音について、蔵文で基字に先行する子音がない有声音字 g, j, d, b, dz, zh, z は、基本的にそれぞれの調音点の無声無気音に対応する。たとえば、以下のようなものである。

ˈpa 「めす牛」 (*ba*)

ˈci 「畑」 (*zhing*)

ˈtɕɔ 「熊」 (*dom*)

ˈsi: ba 「露」 (*zil pa*)

ただし、ˈza mo 「帽子」 (*zhwa mo*) のように、有声音で現れる例もある。

以上の蔵文形式が語中に来る場合は有声音として実現される。

語頭の場合

語中の場合

ˈcɕa 「茶」 (*ja*)

ˈme: jja 「バター茶」 (*mar ja*)

ˈsɛ 「ごはん」 (*zan*)

ˈso: zɛ 「朝食」 (*zhogs zan*)

また、これらの文字に足字がある場合も同じく無声無気音に対応する。たとえば、以下のようである。

ˈɕa 「鶏」 (*bya*)

ˈtɕʰ? 「6」 (*drug*)

ˈtɕɔ 「壁」 (*gyang*)

ˈtɕʰ? 「かげ」 (*brag*)

以上の蔵文有声音字に先行子音（頭字、前接字）が存在するとき、Bodgrong 方言では有声音で現れる。たとえば、以下のようである。

ˈ<sup>h</sup>ga 「好きだ」 (*dga*)

-<sup>h</sup>dza 「漢族」 (*rgya*)

ˈ<sup>h</sup>jjə wa 「蚤」 (*lji ba*)

ˈ<sup>h</sup>zə 「瑪瑙」 (*gzi*)

-<sup>h</sup>du 「石」 (*rdo*)

ˈ<sup>h</sup>zə 「4」 (*bzhi*)

なお、蔵文 *dbug* 「空気」の対応形式も有聲閉鎖音が現れ、<sup>h</sup>boʔ となる。

### 3.1.2 蔵文足字 y, r および蔵文 c/ch/j/sh/zh 対応形式

次に、蔵文足字 y, r の対応形式を取り上げる。というのは口語形式として蔵文足字 y, r が基字とともに音変化を起こし、その結果調音点の異なる破擦音や摩擦音が成立させていることが大半で、これらの口語形式と蔵文に基字としてもともと存在する c, ch, j, sh, zh などの口語対応形式とどのように合流しているかが方言差異を分析する手がかりになるからである。

#### 蔵文 Ky 対応形式

基本的に前部硬口蓋破擦音に対応する。

ˈ<sup>h</sup>dza 「100」 (*brgya*)

ˈ<sup>h</sup>tɕu fie 「酸っぱい」 (*skyur po*)

-tɕ<sup>h</sup>eʔ 「あなた」 (*khyod*)

ただし、蔵文 *khyi* 「犬」は <sup>h</sup>tsʰə のように歯茎破擦音と対応し、蔵文 *skyid po* 「幸せな」は <sup>h</sup>ci: pu のように前部硬口蓋摩擦音と対応する。

## 蔵文 Py 対応形式

基本的に前部硬口蓋摩擦音に対応する。

ʼɕʰo: bu 「裕福な」 (*phyug po*)                      ʰɕō kʰə 「狼」 (*spyang khu*)  
ʼɕa 「鶏」 (*bya*)

以上に現れる前部硬口蓋摩擦音は、音体系上の性質により、硬口蓋摩擦音と交替するという現象が認められる。

## 蔵文足字 r 対応形式

ここで扱う蔵文足字 r 対応形式には蔵文 pr, ph, br を含むもの (Pr)、kr, khr, gr を含むもの (Kr)、tr, dr を含むもの (Tr) がある。これらはすべて基本的にそり舌閉鎖音に対応する。

ʼʰaʔ 「血」 (*khrag*)                                      ʰtʰoʔ 「細い」 (*'phrog*)  
ʰtə pʰe: 「ナイフ」 (*gri* ?)                              ʰtʰi 「雲」 (*sprin*)  
ʰʰa 「髪」 (*skra*)    ʰʰi: 「蛇」 (*sbrul*)  
ʰʰdu 「行く」 (*'gro*)    ʰtʰe 「思う」 (*dran*)  
ʰtə 「書く」 (*bri*)    ʰxa ʰdə 「鬼」 (? *'dre*)

対応する蔵文が不明な箇所については?で示している。

## 蔵文 c/ch/j 対応形式

基本的に硬口蓋破擦音に対応する。

ʰçʰu 「水」 (*chu*)    ʰtʰjə ʰtʰe 「世界」 (*'jig rten*)  
ʰça 「茶」 (*ja*)    ʰçɕu 「10」 (*bcu*)  
ʰçʰu ʰtʰi 「白塔」 (*mchod rten*)

ただし、ʰdʒiʔ 「重い」 (*ljid*) のように前部硬口蓋破擦音に対応する例もある。

## 蔵文 sh/zh 対応形式

基本的に前部硬口蓋摩擦音に対応する。

ʰɕʰa 「肉」 (*sha*)    ʰço: le 「朝」 (*zhogs* ?)  
ʰɕʰi pʰö 「木」 (*shing phung*)                              ʰçə 「4」 (*bzhi*)

## まとめ

ここで扱った Bodgrong 方言における対応関係を整理すると、以下のようになる。

蔵文形式	代表的な対応音	蔵文形式	代表的な対応音
c/ch/j	硬口蓋破擦音		
Ky	前部硬口蓋破擦音	Kr	そり舌閉鎖音
Py	前部硬口蓋摩擦音	Pr	そり舌閉鎖音
sh/zh	前部硬口蓋摩擦音	Tr	そり舌閉鎖音

すなわち、蔵文 Py 対応形式と蔵文 sh/zh 対応形式が前部硬口蓋摩擦音に合流・一致し、蔵文足字 r をもつ形式も一律そり舌閉鎖音に合流するという形になっている。

## その他

以上で触れなかった蔵文足字 r を含む形式に sr がある。Bodgrong 方言の対応形式は以下のように基本的に足字 r の脱落と分析できる。

ʼsʰoʔ 「命」 (*srog*)

ʼsʰowʔ 「薄い」 (*srab*)

ʼsʰe: ma 「豆」 (*sran ma*)

ʼsʰa ʰtoʔ 「固い」 (*sra ʔ*)

### 3.1.3 蔵文 l/y 対応形式

まず、Bodgrong 方言の蔵文 l 対応形式は、蔵文 l, lh の場合、以下のように /l/ または /l̥/ となる。

ʼlā 「道」 (*lam*)

ʼl̥a 「神」 (*lha*)

ʼluʔ 「羊」 (*lug*)

ʼl̥ā 「靴」 (*lham*)

ʼlu 「年」 (*lo*)

ほかの l を含む蔵文形式の場合、<sup>h</sup>l/ または <sup>h</sup>l̥/ となる。

ʼ<sup>h</sup>l̥ō 「おす牛」 (*glang*)

ʼ<sup>h</sup>la ge: 「月」 (*zla dkar*)

ʼ<sup>h</sup>la ma 「ラマ」 (*bla ma*)

ʼ<sup>h</sup>l̥a 「編む」 (*sla*)

-ʼ<sup>h</sup>l̥ū mbe 「風」 (*rlung ʔ*)

ʼ<sup>h</sup>lawʔ 「学ぶ」 (*slab*)

次に、Bodgrong 方言の蔵文 y (基字) 対応形式は、以下のように基本的に /j/ となる。

ʼji: 「うさぎ年」 (*yos*)

ʼ<sup>h</sup>jaʔ 「ヤク」 (*gyag*)

ʼjeʔ 「持っている」 (*yod*)

ただし `zi gi 「本」 (*yi ge*)、`?e: ma 「花椒」 (*g.yer ma*) は例外である。

### 3.1.4 蔵文足字 w 対応形式

Bodgrong 方言では、蔵文足字 w が発音に反映されない。たとえば以下のようなものである。

`ts<sup>h</sup>a 「塩」 (*tshwa*)                      `za mo 「帽子」 (*zhwa mo*)  
 `rə<sup>h</sup>cçu? 「角 (つの)」 (*rwa cog*)

### 3.2 母音および母音+末子音

語末位置における基本的な対応関係は以下のように示すことができる。ただし、蔵文再添後字 s は口語形式に明確な対応関係を得られないため、以下の表では省略する。また、空白の箇所は対応形式が不明である。

V\C	#/'	b	d	g	m	n	ng	r	l	s
a	a	ɔw? / əw?	e?	ɑ?	ā	ẽ / ě	ō	ɛ:	i:	i:
i	ə		i?	i?		ĩ / ě	ĩ		i?	i:
u	u / ʊ	ũ?	i?	u?	ũ	ẽ	ũ	ə:	i:	i:
e	i / e	ej? / əw?	e?	i?	ǎ	ĩ	ĩ	e: / ə:	wi:	e:
o	u		e?	o?	ō	ẽ	õ / ũ	ʊ:	e:	i:

Bodgrong 方言では、蔵文との対応関係が一対一にならないものが比較的多く、上に示したのは単なる傾向である。

特に注目できるのは、蔵文後接辞 d, n, l に対応する口語形式が複数認められる点、蔵文 or が中舌円唇母音になる点などが挙げられる。これらは周辺の方言で多く見受けられる特徴とは言い切れない。

### 3.3 古蔵文に対応する口語形式

Bodgrong 方言には、少数ながら古蔵文に対応する口語形式をもつものがある。

語義	Bodgrong 方言	蔵文	古蔵文
火	`ŋi	<i>me</i>	<i>smye</i>
名前	`ŋō	<i>ming</i>	<i>mying</i>

以上に掲げた語形式は、いずれの方言においても古蔵文との関連が見出される。ところが、これらの例と並行すると考えられる以下のような例では、古蔵文ではなく蔵文と対応する。

語義	Bodgrong 方言	蔵文	古蔵文
目	` <sup>h</sup> mi?	<i>mig</i>	<i>dmyig</i>
夢	` <sup>h</sup> mə lā	<i>rmi lam</i>	<i>rmyi lam</i>
ない	`me?	<i>med</i>	<i>myed</i>



## 4 Bodgrong 方言の方言特徴とその類型

3節において、Bodgrong 方言の蔵文から見た諸特徴を簡潔にまとめた。本節ではこれらの特徴について、Bodgrong 方言の周辺で話される方言の事例と対比することを通じて、その方言特徴を明らかにする。1節で述べたように、Suzuki (2013) では Bodgrong 方言の方言分類上の位置を sDerong-nJol 方言群の独立下位方言群と考えている。この言語学的根拠を Bodgrong 方言話者の祖先の居住地（故地）と言われる地域で話される雲嶺山脈西部下位方言群の諸方言（直接関連するのは雲嶺郷永支村の gYanggril 方言と燕門郷茨中村の Tshodrug 方言の2種）の事例と対照することによって検討する必要がある。また、ミャンマーで話されるカムチベット語 Sangdam 方言との異同も合わせて示す。なお、察隅県察瓦龍郷で話される Tshawarong については、方言分類も決定できないほど資料が不足しているため、言及できる点に限りがある。なお、雲嶺山脈西部下位方言群の概要については鈴木 (2008) を参照。議論は蔵文対応形式から見た方言特徴と非蔵文対応形式から見た方言特徴の2つに分けて行う。

### 4.1 蔵文対応形式から見た方言特徴

#### 4.1.1 蔵文足字 y, r および蔵文 c/ch/j/sh/zh 対応形式

ここでは 3.1.2 節で検討した蔵文対応形式を体系的に見ていく。Bodgrong 方言では足字 r を伴うものは、蔵文 sr を除いてそり舌閉鎖音に対応する一方、足字 y を伴うものおよび蔵文 c/ch/j 対応形式の間で一致が見られない点に特徴づけられるといえる。

これらについて、足字 r を伴う例については、雲嶺山脈西部下位方言群に属する多くの方言で Bodgrong 方言と同様の対応関係を示す。Sangdam 方言についても同様である。そのため、この点はここで扱う方言の差異を議論するときに重要な役割を果たすものではない。一方で足字 y を伴うものおよび蔵文 c/ch/j 対応形式に関しては、非常に多くの異なりを見出すことができる。

まず蔵文 c/ch/j 対応形式を中心にすえて見る。Bodgrong 方言では蔵文 c/ch/j 対応形式が硬口蓋破擦音になる点に注目すると、これと共通する特徴をもつのは現段階では Sangdam 方言に限られる。雲嶺山脈西部下位方言群では通常前部硬口蓋破擦音に対応し、かつ蔵文 Ky 対応形式と合流している。Bodgrong 方言では蔵文 Ky 対応形式が前部硬口蓋破擦音となり、これは雲嶺山脈西部下位方言群とも Sangdam 方言とも一致する音対応である。Tshawarong 方言では蔵文 c/ch/j 対応形式が前部硬口蓋破擦音となり、蔵文 Ky 対応形式が歯茎破擦音となる点から見て、まったく異なる類型に属している方言であるといえる。

一方で蔵文 Py 対応形式は Bodgrong 方言が前部硬口蓋摩擦音、Sangdam 方言が前部硬口蓋破擦音となり、雲嶺山脈西部下位方言群では Tshodrug 方言を含む多くの方言で前部硬口蓋摩擦音になるが、gYanggril 方言を含む少数でそり舌摩擦音となる。後者の方言では蔵文

sh/zh 対応形式と基本的に合流し、いずれもそり舌摩擦音となっている。これについては、Bodgrong 方言では同じく蔵文 Py 対応形式と蔵文 sh/zh 対応形式は合流するけれども、前部硬口蓋摩擦音になる点で異なりがある。

以上にまとめた特徴を見る限り、Bodgrong 方言の蔵文対応形式は周辺のどの変種とも一致していないことになる。Sangdam 方言とのみ共通する音対応は蔵文 c/ch/j 対応形式であり、雲嶺山脈西部下位方言群の多くの方言とは蔵文 Py 対応形式が共通する。チベット言語学の視点から見ると、前者の音対応は少数派であることから、これが共通する点は注目に値する。ただし、この音変化が共通の改新といえるかどうかはさらに考察を要する。

#### 4.1.2 蔵文 l/y 対応形式

ここでは 3.1.3 節で検討した蔵文対応形式を見る。

Bodgrong 方言では、蔵文 l 対応形式は /l/ となり、蔵文 y 対応形式は基本的に /j/ に対応する。これはチベット言語学の中で非常に広く見られる対応関係である。それが問題になるのは、雲嶺山脈西部下位方言群の中に前者が /j/ に対応し、後者が /ɹ/ に対応する方言が認められるからである。そのような方言の 1 つが gYanggril 方言である。ただし Tshodrug 方言では Bodgrong 方言と同じ対応関係を示す。このとき、Bodgrong 方言と gYanggril 方言には典型的に大きな差異が認められることになる。これは両者に系統関係が認められないか、gYanggril 方言が 200 年程度の間に音変化を起こしたかのどちらかの可能性を指摘することができる。というのも、gYanggril 方言のように特別な音変化を起こした状態から広く見られる音対応へ再び変化を起こしたとは考えにくいからである。

#### 4.2 非蔵文対応形式から見た方言特徴

Bodgrong 方言には少なくない蔵文と対応しない音形式をもった語が認められる。たとえば次のような語はヌン語からの借用語と考えられる：ʔa kʰə 「祖父」（トゥルン語 a<sup>31</sup> kaŋ<sup>53</sup>）、<sup>h</sup>giū 「硬い」（トゥルン語 greŋ<sup>55</sup>）など（トゥルン語は《雲南省誌》（1998）の獨龍江方言のもの）。また、Bodgrong 方言に独自のものも認められ、たとえば次のような例がある：<sup>ŋ</sup>ga la? 「光」、<sup>ʼ</sup>mi tʰi 「みかん」、<sup>ʰ</sup>gu <sup>h</sup>gwə- 「蜘蛛」<sup>^</sup>gu gra 「周り」など。その一方で、チベット語方言語彙として他の方言と共通するものも少なくない。たとえば次の語は雲嶺山脈西部下位方言群の多くの方言と酷似する形式である：ʔa gē 「おば」、<sup>ʼ</sup>pʰa: le 「子ぶた」、<sup>ʼ</sup>na me 「猫」、<sup>ʼ</sup>kə rə 「青稞」など。

最後の種類の語彙が複数認められるということは、語形式の伝播を考えるに当たり、Bodgrong 方言と雲嶺山脈西部下位方言群の方言の間に何らかの関連が認められることを示唆している。このことは、Bodgrong 方言の話者の祖先が雲嶺山脈西部下位方言群の分布地域からの移民であるという事実と符合するといえる。

## 5 まとめ

本稿では、貢山県丙中洛郷で話される Bodgrong 方言の方言特徴を蔵文を基準に分析するとともに、その各種特徴について、Bodgrong 方言の周辺で話されるカムチベット語諸方言と対照し、相違点を考察した。

Bodgrong 方言の話者の故地とされる地域として、雲嶺山脈西部下位方言群に属する方言が話される徳欽県の雲嶺郷永支村と燕門郷茨中村が挙げられるが、この両者は音声学的に異なる特徴をもっていることが知られている。分析の結果、Bodgrong 方言の特徴は後者の方言と類似する点を複数持っていることが分かったが、それは前者の方言が最近になって音変化を経験した可能性を否定するものではないため、Bodgrong 方言の分析から歴史的事実に近づくのは限界があるともいえる。また、語彙方面では雲嶺山脈西部下位方言群を特徴づける語彙も複数用いられていることから、確かに当該方言群との関連を認めることができる。一方で Bodgrong 方言に独自の特徴も存在することが判明した。特にヌン語からの借用語も認められることから、丙中洛においてカムチベット語とヌン語の間における一定の言語接触を認めることができる。

## 参考文献

- 何林 [He, Lin]、丁愛華 [Ding, Aihua] (2009) 《丙中洛阿怒民歌》雲南人民出版社
- 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2004) 《實用藏文文法教程 [修訂本]》四川民族出版社
- 孫宏開 [Sun, Hongkai]、黃成龍 [Huang, Chenglong]、周毛草 ['Brug-mo-mtsho] (2002) 《柔若語研究》民族出版社
- 鈴木博之 (2008) 「迪慶州瀾滄江流域カムチベット語（徳欽/雲嶺/燕門/巴迪方言）の方言特徴」『ニダバ』第 37 号 115-124
- (2012) 「カムチベット語 Sangdam 方言の音声分析とその方言特徴」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 83 号 37-58
- Suzuki, Hiroyuki (2013) *Overview of the dialects spoken in rGyalthang from the historical perspective*. Paper presented at 13th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (Ulaanbaatar)
- 《雲南省誌》編纂委員會 [Yunnan Shengzhi Bianzuan Weiyuanhui] (1998) 《雲南省誌 59 少数民族語言文字誌》雲南民族出版社